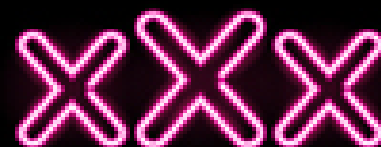
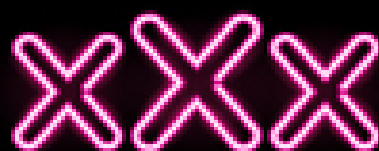


師匠とAV



仄暗い劣情の底から

EntsCat

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18781958>

R-18, モ腐サイコ100, 芹霊, ♡喘ぎ, モ腐サイコ小説50users入り

師匠が出演してるAVを見つけてしまった芹沢の芹霊すったもんだ
最終話です。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブックマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！
とても励みになっています🌸

マシュマロもありがとうございます〜！
[https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion](https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text&utm_source=promotion)

Table of Contents

- [仄暗い劣情の底から](#)

仄暗い劣情の底から

「俺はお前を利用したんだ、芹沢。その罪悪感に、もう、耐えられない」

霊幻さんが疲れた顔でぼつりぼつりと、でも口を挟む隙を与えずに話し出す。

「お前の気持ちを利用した。最初からそうだ。告白を保留にしてたのだって、『芹沢からの好意を失うのは惜しい』と思ったからだ。ズルいんだよ、俺は」

反論しようとして、言葉が出ない。

その通りだ、と思ってしまった。

「でもな、俺はこんな俺が大嫌いなんだ。できるだけ、そうでいたくなかった。芹沢を俺から守りたかった」

霊幻さんが俯く。

「なのに、俺が金を稼ぐためにＡＶにまでお前を出させてしまった。一生残るデジタルタトゥーだ。それだって、俺の処女が欲しいだろうお前なら、うんと言うだろうと思った俺が、お前をおとしいれたんだ」

ちがう、ちがう。そう思っても、何て言ってもいいか分からなかった。

「男の処女になんの価値があるかよ。お前が俺を好きだから利用できただけだ。それを俺は分かった。……優しいお前を、骨の髄まで、しゃぶりかけた。このままじゃ、芹沢を一生俺に奉仕させちゃう」

霊幻さんの目にどんどん暗い影がかかる。

「俺はそんな俺が、大嫌いだ」

あ、泣きそう。霊幻さんは本気で、そんな自分が嫌いなんだ。

「お前といると、俺はどんどんお前を利用しようとしてしまう。俺はどんどん俺の嫌いな自分になっていく。それがたまらなく嫌だ。嫌で嫌で死にそう。……限界なんだよ。別れてくれ、芹沢」

違う。違う。言わなきゃいけないことがいっぱいある。だけど、言葉にならない。

でも、これだけは。

「嫌です。別れません」

これだけは、言わないといけないのが分かる。

「だって、違うじゃないですか」

「……何がだよ」

「俺には上手く言えないんですけど、違うと思うんです。だから、別れない」

はぁ、と疲れ切った顔で霊幻さんは所長の椅子にもたれかかる。

「……勝手にしろ」

ほ、とひとまず、息をついた。

※

霊幻さんに言われたことが頭の中をぐるぐる回って、上手く整理できない。でもこのまま放置したら悪化することだけは分かる。

俺は悩みに悩んで、影山くんを呼び出した。

最終手段だった。

相談所の近くのファミレスで、そわそわと影山くんを待つ。

「こんにちは、芹沢さん」

パーカーにジーンズのラフな格好で、影山くんは来てくれた。

影山くんが飲み物を注文するのをじっと待つ。

何故だか「娘さんを下さい」を言いにかけている気分だった。

「それで、どうしたんですか」

フラットな感情の読めない影山くんの声が響く。

「俺、実は霊幻さんとお付き合いさせて貰ってて」

「知ってます。師匠から聞きました」

「え」

ショックを受ける。霊幻さんにとって、やっぱり優先すべきはこの子なんだ、とあってしまう。

「でも、別れようって言われてしまったんだ。罪悪感に耐えきれない、って」

「罪悪感」

影山くんはその言葉をもごもごと口の中で転がすように声に出す。

「俺を利用するのに耐えられなくなった、って」

「利用」

同じようにモゴモゴと口を動かす。

「詳しく師匠が何て言ってたか教えてもらっていいですか」

そう言われて、俺は霊幻さんが言ったことをできるだけ、A Vの部分だけ伏せて忠実に再現する。

影山くんは少しだけ眉間に皺を寄せた。

「それ、罪悪感じゃなくて甘えてるだけじゃないですか。甘えるのに慣れてないだけだ、師匠は」

「甘える……」

「利用なんて過激な言葉を使うから、悪いことをしてる気分になる。他人なら利用かもしれないけど、恋人の間ならそうじゃないこともあるじゃないですか。例えば極論ですが、もし僕がツボミちゃんと付き合えて、ツボミちゃんがお金に困ってるとして、僕に借りずに他の男の人に借りてたら、僕はものすごく嫌な気分になります。最初に頼るのは僕でいて欲しい」

ず、と影山くんは冷たい緑茶をストローで吸う。

「利用してもらって構わない。だって恋人なんでしょう。甘えて貰うのが、嬉しくないはずがない」

……やっぱり影山くんは霊幻さんの弟子なんだな、としみじみ思う。霊幻さんが言ったことの本意を、ちゃんと汲み取れるんだから。

「ありがとう影山くん、やっとこれで霊幻さんに反論出来そうだ」

「ところで芹沢さん。僕、ずっと気になってたんですけど」

「ん？」

「師匠は何故芹沢さんと付き合ったんですか？」

一瞬で場が凍った。

「師匠はこういうことにはすごく慎重なんです。ましてや、自分の気持ちも定かじゃないのに誰かとお付き合いするような、そんな人じゃない。……芹沢さん、師匠に何を言ったんですか？」

ああ。

その黒曜の瞳から、逃げられない。

「……脅したんだよ」

「え？」

「靈幻さんの弱みを握って、脅したんだ」

すう、と影山くんの目が考えるように斜め上を見る。

「なるほど。納得いきました」

返答があまりに無感情で、緊張する。

「師匠にはそれぐらいしないと、いけなかったんですね」

「……責めないの？」

「芹沢さん。師匠は弱みを握られたくらいで、好きでもない人と付き合ったりしませんよ」

衝撃を、受ける。

「確かに脅したりすることは常識的には良くないことかもしれないけど、ヒトとヒトの間には、その人たち独自の関係性があるから、悪いことが悪いこととは限らないんです」

ずこー、と緑茶を飲み切る影山くん。

「師匠は口が上手いし頭の回転が速いから、言葉で混乱させられる時もあると思うけど、気持ちはそんなに複雑じゃないんです」

じ、と穏やかな瞳が俺を見つめる。

「大事なことは耳には聞こえないんですよ。師匠の行動から、感じてください」

そういう僕も、よく分からない時も多いんですけどね、と微かに笑う影山くん。

「かなわないなあ……」

思わず苦い声が出る。

「僕だって師匠のことは大事にしていますが、今は芹沢さんの気持ちには、勝てないですよ」

「！」

ほんとうに、かなわない。

※

何となく、アダルトサイトで自分達のAVのレビューを見るのが日課になっていた。

『抜けた』とか『新隆可愛い』とか言うレビューにニヤニヤしてい

たら。

『なんで新隆を他の男に抱かせた！このＡＶはクソ、見る価値無し』

という新着レビューに驚いてしまった。

『俺の新隆だったのに、なんでこんなことに、あらたかあらたかあらたかあらたか』

『あらたか愛してる』

『鈴木太郎ころす』

同一IDの書き込みはそこで終わっていて。

ぞく、と悪寒が走った。

ピリリリリ！

固まっていたら、プロデューサーさんから電話がかかってきた。

「あ、芹沢ちゃん？元気〜？」

明るい声にホッとする。今、見たことを話そうとして。

「あのね、会社に芹沢ちゃんの殺害予告が届いちゃったのよ。それで今、警察と話してるの」

また、固まった。

「どうも前のＡＶを見て、霊幻ちゃんにガチ恋しちゃったファンみたいだね。新作をバキバキに割ったものと一緒に、霊幻ちゃんの隠し撮り写真が同封されてて、結構ヤバイ感じなのよ。霊幻ちゃんにはもう伝えてあるけど、しばらく気を付けてね」

電話が切られる。

嫌な汗が流れる。霊幻さんは有名人だ。職場の場所も簡単に特定できる。

—顔があまり映ってなくて偽名の俺よりも、霊幻さんを襲う方が簡単だ。

嫌な予感がして、すぐスーツに着替えて始業前の霊とか相談所に向かう。

いつも霊幻さんは俺が出勤する１時間前に相談所に来ていて、雑務をやっていた。

どうか。

心配しすぎでありますように。

※

「従業員の方はまだですか、大切な話があるんです」

走ってたどり着いた相談所。

中から、見知らぬ男の声が聞こえる。

「もうしばらくお待ちください」

柔らかな客用の霊幻さんの声。

ああ。

悪意だ。

深呼吸をして、そっと名刺を構える。

「—おはようございます」

ドアを開けると、客用ソファーに座っていた目深帽子の人物がにわかに立ち上がった。

男は顔を引き攣らせながら、……ぱちん、とバタフライナイフを構えた。

「鈴木太郎さんですか」

「—そうです」

答えた瞬間、ギラリと男の目が光って、叫びながら突進してきた。

「死ねえええええええええ！！」

「芹沢！」

焦って霊幻さんが叫ぶ。

俺はいたって冷静だった。A Vよりも、こういう現場の方が慣れている。

男をふっ飛ばそうとして、はたと考える。ここは事務所だ。被害が出るのは困る。

俺は一旦ナイフで刺されることにした。……バリアを。

「芹沢あっ！！」

霊幻さんが悲鳴を上げる。でも俺は男の手首を捕まえていた。

「警察に行きましょう」

カラン、とバリアを解除したらナイフが床に落ちた。

「くそっ！」

——油断していた。

男は手首の関節を外して、ぐにゅりと俺の拘束から逃れる。

「あらたかあああああっ、あいしてるよおおおおお！！」

パチン、と2本目のナイフを取り出し、霊幻さんに向かって走り出した。

「しまっ……！」

両手をかざして超能力の最大出力で男を押さえつける。

「かはっ……！」

男が鼻血を出す。かまうもんか。

こいつは霊幻さんを殺そうとした。

それが頭をぐるぐる回る。許さない。許せない。目には目を、殺意には、殺意を——

「芹沢、超能力を解除してくれ。殺しちまうよ」

穏やかな霊幻さんの声に、肩の力が抜ける。

「大丈夫だから」

「……はい」

よろよろと立ち上がった男の手を霊幻さんが蹴り上げる。ナイフが天井に刺さった。

「あらたかっ」

霊幻さんに抱きつこうとした男の手を、霊幻さんが後ろ手に捻りあげる。

「いてててててっ！」

「芹沢、警察に電話」

ほどなくして警察が到着して。

男は凶器と共に連れて行かれた。

※

へたへたへたり、と客用ソファーに座り込む霊幻さん。

「……芹沢に、何も無くて良かった……」

おかしい事を言う人だな、と思った。確かにあの男は俺狙いだったけど、俺の敵では無いのに。現に、すぐターゲットを霊幻さんに変えたじゃないか。

いや、待て、違う。

大事な事は、耳に聞こえないんだ。

「霊幻さん、そんなに俺のことが大事なんですね」

「ほふぁへっ！？！？」

霊幻さんが真っ赤になる。

「なんっ、おれっ、そんなことっ、」

「荒事には俺の方が100倍慣れてるので、心配はご無用ですよ。でも、不安になっちゃったんですよ？俺が殺されるかも、って。そう思って下さってありがとうございます。嬉しいです」

「ちがっ、おれはっ、」

ああ。

この人は、感情を見てあげないといけないんだなあ。

「おまえ、なんなんだよ、今日は……」

「影山くんにアドバイス貰いました」

「……あいつ、何言ったんだ……」

顔を真っ赤にしたまま、霊幻さんはどさっと所長の椅子に座る。

「霊幻さん、この間の話ですけど」

「……うん」

「俺は霊幻さんが俺にワガママ言ってくれるの、嬉しいですよ。恋人の特権だと思ってます」

「……は？」

「俺を利用するってことは、俺に甘えるってことですよ？俺は霊幻さんに甘えて貰って、頼って貰えるの、嬉しいです」

「芹沢、AVに出演させる、ってのは、そういう次元の話じゃない。下手したらDVの範囲だ」

「……霊幻さんは、自分だけが悪役になりたいんですね」

「あ？」

「俺が善意だけでAVに出たと思ってるんですか？俺をいい子にしたいのは分かりますが、ちゃんと俺のズルさも見てくださいよ」

「ズルさ、って」

「霊幻さん、撮影が無かったら、あのタイミングで俺とセックスしてくれましたか？」

「——！」

霊幻さんが黙り込む。

「霊幻さん、まだ自分の気持ちが分からない、って言ってましたもんね。そんな状態でセックスなんてしてくれる訳が無かった。でも俺は早く霊幻さんを抱きたかった。既成事実が欲しかった。そんな時にA Vの話は、願ったり叶ったりだったんですよ、俺には」

「……俺のせいだな」

暗い顔をした霊幻さんがぽつりとこぼす。

「は？」

「俺が芹沢をそんなズルいやつにしてしまった。俺の対応がまずかったせいだ。俺がもっと上手くやっていれば——すまない、芹沢」さすがに。

怒りで全身が震えた。

「何様のつもりですか。ふざけないでくださいよ。俺の罪は、俺のものだ。霊幻さんが背負えるものじゃない。霊幻さんは周りに夢を見過ぎなんですよ。ちゃんと俺を見てください。霊幻さんを手に入れるために、なりふり構わなかった、俺を」

「芹沢……」

戸惑った目が、それでも確かに俺を見つめる。

「付き合うためにA V出演で脅して、セックスするために負債を利用した。そんな卑怯者は、嫌いですか？」

「自分の心地よさのためにお前の気持ちを利用して、ちょうどいいからとA Vに出させた卑怯者の俺がだぞ。お前を嫌いな訳が無いだろう」

くすりと笑い合う。

「俺たち悪党だなあ」

「ちょうどいいと思いますよ。きっと俺たちはお互いを搾取して生きていくんですよ」

悪そうな顔で霊幻さんが笑う。

「骨までしゃぶってやる」

俺も負けじと笑い返す。

「喰い荒らしてあげますよ」

俺たちは噛み付くようにキスをして。

主導権を奪い合おうとする口付けは、ケモノの争いのようだった。

※※※※※※

「なーあ、セックスしたいか？芹沢？」
裸でラブホのベッドに座った霊幻さんが、くすくす笑いながら数珠
繋ぎのコンドームをヒラヒラと振っている。

「……したいです」

「だあめ。気分じゃない」

ニヤニヤと笑う霊幻さんを、もう臨戦体制の俺が押し倒す。

「俺に無理矢理やられたって言い訳が欲しいなら、あげますよ」
霊幻さんがほくそ笑む。

「……ケダモノ」

「はいはい、ケダモノで結構です」

A Vから1か月、俺は霊幻さんに触れていなかった。喧嘩をして仲
直りをして、……少しずつ共犯者じみた仲を深めていって。

今日、やっとお許しが出た。

ぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜて、顔に触れる。スッと伸びた腕に触
れて、鎖骨、肋骨、はらわた、骨盤を辿る。

「ん……」

霊幻さんは黙って受け入れてくれている。

スラリと伸びた足に触れて、全身味わってから、まだ柔らかい性器
に触れた。

「あ、っ」

急所への刺激に霊幻さんは身体を固くする。

「優しくしますから」

裏筋を親指で擦り上げると、気持ちいいのか徐々に霊幻さんの力が
抜けていく。

目の前にあるのはデリケートでテーブルマナーの厳しいフルコース
だ。真心が試されている。

「あっ……んうっ、ん……」

性器をいじりながら、カウパーでヌメる手で乳首を撫でる。

「そこ……気持ち良くない……」

何度も撫でていると、次第に硬くなって指で弾けるようになる。

「開発するといいらしいですよ」

「しなくていい……」

胸で感じるのを恥ずかしがる霊幻さんを、うっすら笑って見下ろす。

「嫌です。開発して、ここだけでイけるようになりましょうね」

「！」

目を見開いて期待と絶望に唇を震わす霊幻さん。

「あ、おちんちん大きくなりましたね。期待したんですね」

人差し指の爪の端で乳首の先端を触れるか触れないかの距離でいじりながら笑う。

ピクピク揺れる身体は、胸で感じ始めたことを教えてくれていた。

「……お前も俺でないとイけない身体にしてやる……」

「少なくとも俺、最近霊幻さんでしか勃たなくなってきましたよ。元々AVも霊幻さんっぽい人のしか見てなかったですけど」

「なんでだよ」

目を細める。水を欲しがる霊幻さんに、たっぷり注いであげないと。

「霊幻さんが好きだからですよ。俺は霊幻さんに出したいんです。俺の精子は霊幻さんに注ぎ込む用です」

「……ばか」

顔を赤らめる霊幻さんが可愛い。欲しがりな俺のバラは、与えれば与えるほど美しくなるみたいだ。

「……っ、いつまで乳首触ってんだよ」

「ああ、そろそろおしりで気持ち良くなりたいたいですか？」

「そうは言ってないだろ！？」

でも、そういうことでしょう。

真っ赤な顔でぎゃんぎゃん言う霊幻さんは、相変わらず、自分の気持ちは言ってくれない。

俺はローションを超能力で取り寄せて、しっかりと指にまぶした。

「中指が入りますよ」

「……っう」

ゆっくりと指を挿れて、ぬぼぬぼと動かす。

霊幻さんの気持ちいいところを探す、やっぱり指一本だと難し

い。

「2本目行きます」

「は、うっ」

挿れる瞬間の衝撃に霊幻さんの喉が反る。

「ちんこと変わんねーよ、お前の指……っ」

「1人で2本味わえておトクじゃないですか」

「馬鹿っ、慣らしが慣らしになってな……あ！」

ビクン、と腰が跳ねたのを見逃さない。

「このへんですか？」

「やめろっ……さわんな……っ」

ビクビクと腹筋が動く。

俺は指を3本に増やして、こすこすと内部を探った。

「はうっ……！っあ、もう、さんぼん、入っただろ！！さっさと挿れて終わらせろよ！！」

気持ちいいところ見られるの恥ずかしい。もう挿れてもいいからやめて。

……聞こえないはずの声に目を細める。

「霊幻さん手マン好きですもんねえ？気持ち良くなってるところ見せてくださいね」

「あ、あ！やだっ！ぐちゅぐちゅやだって！！あ、あ……っ！」

かあああっ、と身体が綺麗にピンクに染まる。ひくんひくんと内ももを痙攣させながらも、トロンと一瞬でとろけた霊幻さんは射精していなかった。

「……せりざわ」

かすれた声で呼ばれる。

「はい」

「……ぎゅって、して」

！？！？！？

え、突然可愛くなるの心臓に悪いんですけど！？もっと下さい！！

手をシーツで拭いて言われるままに抱きしめる。

「はあ……っ」

ぽかぽかしてる霊幻さんの身体はまだ甘イキしてるみたいだ。

「ん……」

背中を抱きしめながら撫でると、ぴくりと震える。

.....可愛い。

「んあ.....っ」

たまらず口付けると、霊幻さんの舌が必死に応えてくれる。粘膜の擦り合いが気持ちいい。もっと、と舌を追おうとすると、ごり、と霊幻さんの怒張を押し付けられた。

「挿れなくてもいいのかよ？」

もう、挿れて。

そういうことだ。

俺は慣れない手つきでコンドームをつけて、先端を霊幻さんの後ろに押しつける。

「あ.....っ」

ぐに、とめり込ませると、違和感に霊幻さんが枕を掴んだ。

「俺の、這入ってってますよ。暖かくて気持ちいいです」

「そんっ.....あ、ああ」

ず、ずるり、と蛇のように侵入していく。

「——中から喰い荒らしてあげますね」

「っあ！」

ずん、と奥まで挿れると、ぴゅる、と霊幻さんはトコロテンした。

「.....っ、もう少しゆるめてくださいよ」

締め付けが激しい。

「.....しゃぶりつくしてやる」

霊幻さんが舌舐めずりする。

上等、と笑った。

「あっ！あ、う、ああっ♡あんっ♡」

激しく腰を打ち付ければ、甘い声が上がり始める。

「ちくしょうっ♡負けるかよっ♡くそっ♡♡♡」

締め付けてくる隘路をずんずん突き破る。ピクピクと震える性器を掴んで擦った。

「反則.....っ♡♡♡」

身悶える霊幻さんがたまらず射精する。

と、同時にナカでもイって、はぁはぁと息荒く痴態をさらす霊幻さんに、俺も精を叩きつけた。

「……さいこーでした」

「ふん。当然だ……っあ♡」

ぬぽんと性器を抜く衝撃でうっかり喘いで悔しそうにする霊幻さん。

ホントに可愛いなあ、もう。

「ん」

霊幻さんが両手を広げてハグをショモウしてきたので、また強く抱きしめる。

「霊幻さん、愛してます」

「うん」

霊幻さんは顔を俺の胸板にうずめて隠す。

「……せりざわ、俺を離さないで」

「……っ！死んでも離しません！！」

だから。

突然可愛いの勘弁して下さいってありがとうございます！！！！！！

※

師匠、浮かれてるなあ、と花なんか飾り出したのを見て思う。

「芹沢さんと上手くいってるんですね」

「まあなー」

師匠は大輪のバラのトゲをナイフで丁寧に切り落としている。

トゲがあってこそそのバラだと思うんだけど、師匠はどうも、トゲを誤魔化したいようだ。

「師匠、今、幸せですか？」

「まあまあかな」

はにかむ笑顔に朱がさしている。これは相当幸せだな。

良かった、とほっとする。

「師匠、芹沢さんのこと、好きですか？」

師匠は長いまつ毛をきらめかせながらゆっくり瞬きして。

「……好きだよ」

大輪のバラのように微笑う。

芹沢さんには悪いけど。
この光景は、しばらくはずっと見守ってきた僕だけのものだな、と
思った。

トゲごとバラを愛す、ちょっと妬ましい親愛なる後輩へ。
—あなたの苦難に、祝福を。

完